

後志地域の地域振興 - ブルーツーリズムの可能性と課題 - その1

業務名	後志漁村地域における振興方策調査（13-321）
委託者	北海道開発局小樽開発建設部
担当者	（関いずみ）、松本卓也

1. 調査目的

後志沿海地域においては、加工を含む水産業及び養殖漁業の低迷、過疎化や漁業後継者不足等の問題を抱えている。一方で、札幌圏に近く、観光地として有名なニセコ山系に隣接しているという地理的条件を備えている。さらに各地区毎に、深層水の開発（岩内）やウニの陸上養殖（美国）、タラコの水産加工（古平）釣り、スケソ漁、日本海の美しい景観等の地元資源が豊富に存在している。

本調査は、以上のような状況から後志管内の漁村地域における地域振興の可能性を、観光という観点から検討することを目的とする。

2. 調査内容及び方法

(1) 調査対象地域

本調査の調査対象地域は、後志支庁管内の沿海市町村で漁港を有する地区とする。したがって、本調査におけるヒアリング及びアンケート対象は、小樽市・余市町・古平町・積丹町・神恵内村・泊村・岩内町・寿都町・島牧村、以上1市5町3村である。

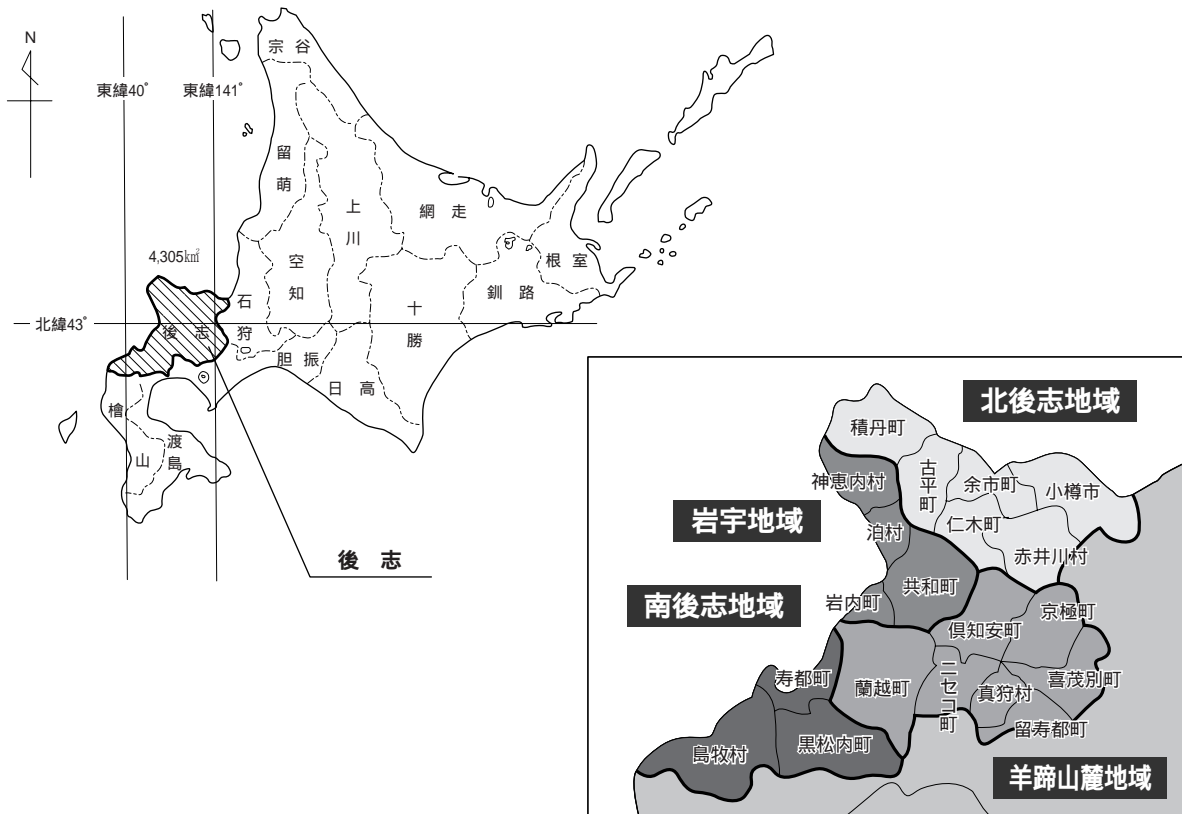


図 - 1 後志地域の位置と地域内市町村

(2) 調査内容

以下に調査フローを示す。

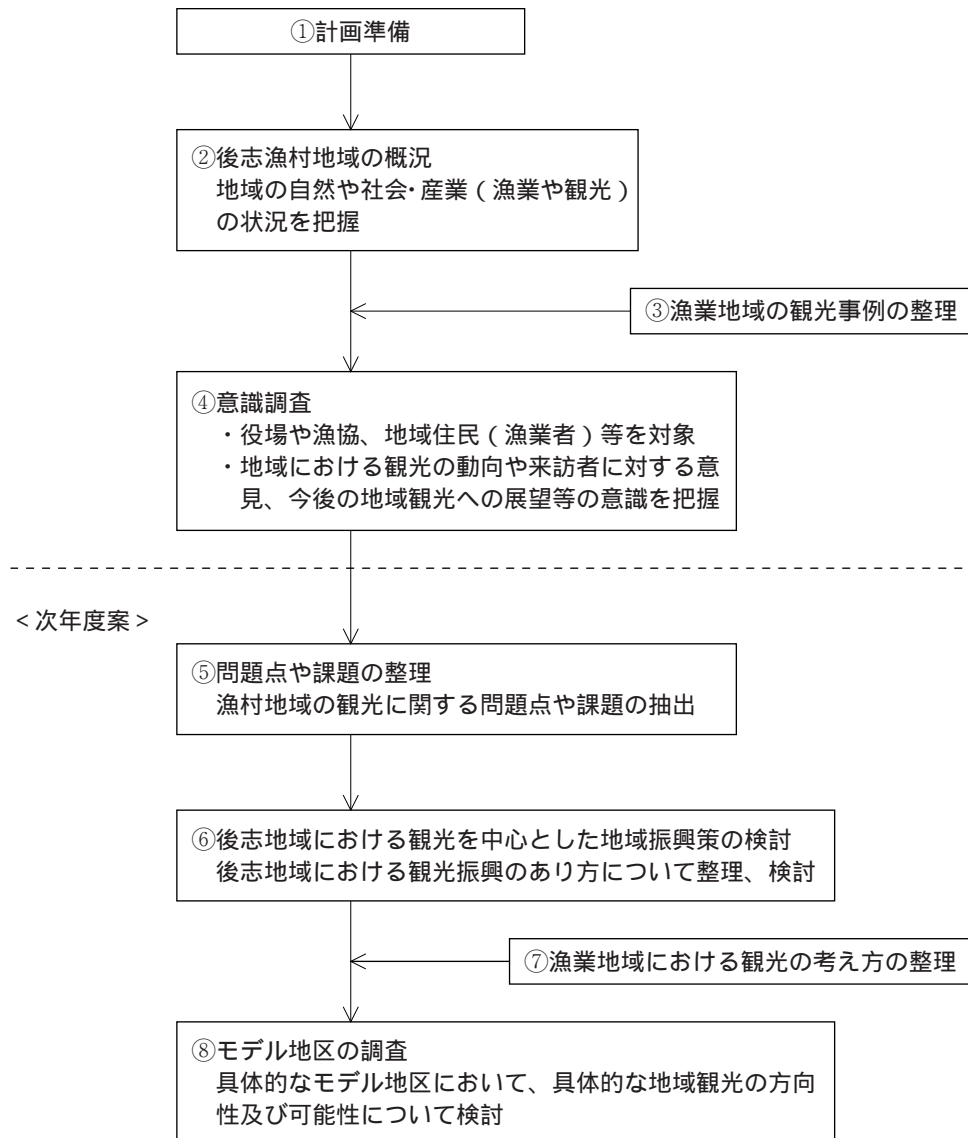


図 - 2 調査フロー

具体的な調査内容は以下の通りである。

①調査準備

調査の目的、進め方及び調査対象地区の確認

②後志漁村地域の概況

地域の自然条件、社会状況や産業、特に漁業や観光に関する状況等の基本事項をデータや文献を用いて整理する

③漁業地域の観光事例の整理

現在漁業地域において試みが始められている観光（ブルーツーリズム等）について、事例を整理する

④意識調査

・ヒアリング調査

役場・漁協・道の駅等の関係者（管内数カ所選定）に、地域漁業と観光に関する状況及び問題点や展望についてヒアリング調査を行う

・行政／漁協アンケート調査

調査対象地区の役場及び漁協に対し、地域におけるブルーツーリズムの活動状況や組織体制の有無、課題や意向についてアンケート調査を行う

・漁業者アンケート調査

調査対象地区の漁業者に対し、都市住民との交流についての意識や問題点、交流事業への展望についてアンケート調査を行う

⑤問題点や課題の整理

②や④で把握した後志地域の現状より、観光に関する問題点や課題、地元の意向を整理する

3. 主な調査結果

(1) アンケート調査結果のまとめ

本調査では、後志漁村地域における振興策として、海や漁業を活用した観光、いわゆるブルーツーリズムの可能性を探るために、行政や漁業者を対象としたアンケート調査を行い、ブルーツーリズムに対する認識の状況や問題点・課題、今後の展望や意向についての意見を収集した。

行政・漁協アンケートは漁港を有する9市町村役場の企画関係課、観光関係課、水産関係課の担当者及び、漁協担当者を対象とした。

漁業者アンケートは各市町村の漁協（11漁協）に所属する漁業者を対象とした。アンケート票は漁協に漁業者への配布を依頼した。その際、回答者の性別や年齢層がなるべく偏らないように、配布時に「若手漁業者（10代から40代前半の方で、青年部員の方等）15名前後、女性漁業者（海上作業だけでなく、陸上作業を含む。婦人部員等）15名前後、その他漁業者10名前後」という条件を記載した。アンケートの配布回収状況は以下の通りである。ただし、漁業者アンケートについては寿都漁協及び盃漁協が無回答であったため、配布回収からこれを除いている。

表 - 1 アンケート対象及び回収の状況

行政・漁協アンケート				行政・漁協アンケート				
配布先	配布数	役場	漁協	配布先	配布数	回収数	回収率	
小樽市	4	3	1	小樽市	小樽市漁協	40	23	57.50%
島牧村	4	3	1	島牧村	島牧漁協	40	35	87.50%
寿都町	4	3	-	岩内町	岩内郡漁協	40	15	37.50%
岩内町	4	3	1	泊村	泊村漁協	40	32	80%
泊村	5	5	-	神恵内村	神恵内村漁協	40	15	37.50%
神恵内村	4	3	-	積丹町	美国漁協	40	33	82.50%
積丹町	5	3	2		積丹漁協	40	11	27.50%
古平町	4	3	1	古平町	古平漁協	40	38	95%
余市町	4	3	1	余市町	余市郡漁協	40	16	40%
合計	38	29	7	合計		360	218	60.56%

表 - 2 行政・漁協アンケート結果まとめ

・後志漁村地域では現段階ではブルーツーリズムへの対応を実際に行っている自治体や漁協は殆どない。
・推進については、行政サイドと漁業サイドの協力体制が図られている。
・運営のための組織等も未整備もしくは準備の段階であり、地区全体を統括するものとはなっていない。
・一部では自発的な組織（ボランティア等）が交流事業に向けての勉強を始める等、今後の動向を見据えた活動が始まっている。
・行政の役割としては、施設整備などのハード面ではなく、ソフト面での強化やそのための支援が重視されている。
・現在でもダイビングや釣り客、プレジャーボートと、漁業サイドとのトラブルが各地区で見られるが、行政サイドとしてこれらトラブルへの対応策を講じる必要性の認識は高い。
・観光資源としては、景観や魚介類、温泉といった自然物やそれを利用したものが主に挙げられる。
・小樽や余市のような観光地では、誘客目的の施設（人工物）が観光資源として認識が高くなっている。
・ブルーツーリズムのプログラムについては、現在でも、民間業者や個人、あるいは漁協や自治体によって少なからず行われている。
・現在のプログラムは、あるイベントの実行やプレジャーボートの管理等、ある一つの事柄に特化したもので、それらがネットワークされるような広がりが見られない。
・ブルーツーリズムの導入に際しては、地域にとっての導入の目的や運営組織、管理体制の確立の重要性が認識されている。
・すでに来訪者とのトラブルという実態があることを反映し、トラブルの事前対応策の必要性が望まれている。
・外来者によるマイナス面（ゴミや環境への負荷）への認識は高い。
・人や情報の往来による地域の活性化という期待感が強い。
・ブルーツーリズムの導入によって地域の構造（漁業のあり方や人の流れ、社会構造）がどう変化するかと言うことについては、不明な点が多い。
・期待と不安の両面があるからこそ、交流事業導入についてのコンセプトづくりが重視されていると考えられる。

表 - 3 漁業者アンケート結果まとめ

・漁業者は現在の地域には活気がなく、この状況をなんとか打破したいという意識を持っている。
・漁業後継者の減少、資源の減少、労働環境（不定期な休日等）など、漁業の問題は多岐にわたっている。
・「交流」に対しては、「人が入ってくるとゴミで汚れる」「人が入ってくると活気がでてくる」という2面性をもって認識されている。
・実際に本人がやる（あるいはやりたい）という意識は薄い。
・活動について、「できるか」という問いかけに対しては「できる」と考えられている。
・ゴミ問題や漁場での漁業とレジャーとの競合、水産資源の影響等は現在生じている問題であり、今後交流事業が推進されると不安感が増す。
・就業機会や収入機会となるのではという期待感と、現在の生活時間の中で新たな活動をこなす余裕があるのかという疑問がある。
・高齢者が参加できるのか、若者の流出に歯止めをかけることができるのかということに関して疑問がある。
・漁協別の集計結果をみると、地区毎に回答の傾向が異なるものがあることが解る。
①地域の活気について 全体的には、「現在はあまり活気がないので、活気のある地域にしたい」という意見が70%となっている。しかし、小樽漁協や島牧漁協では「活気はないが現状のままでよい」という意見がそれぞれ56%、43%と他と比較して高い割合となっており、他地区と異なる傾向を示している。
②都市との交流について 全体的に、都会の人が漁村に入ってくることは時代の流れで仕方がないことであり、どちらかという来訪者を受け入れる気持ちが高いという結果となっている。中でも岩内漁協では都市部の人が入ってくることに、他の地区に比べ反対意見が非常に少なくなっており、「トラブルが増えるので入ってくることに反対」についてはそうは思わない186%、「地域に活気が出るので入ってくることに賛成」についてはそう思う57%となっている。また、美幌漁協では「トラブルが増えるので入ってくることに反対」についてはそうは思わない9%、そう思う29%、「地域に活気が出るので入ってくることに賛成」についてはそう思う3%、そうは思わない126%で、どちらかという人の流入について反対傾向が強い結果となっている。
③都市との交流の長所や短所について 「ゴミなどの環境問題の増加」「観光客とのトラブルの増加」「水産資源の減少」は、3大懸念要素として全体集計でもそう思う割合が高くなっている項目であるが、とりわけ美幌漁協ではこの3項目についてそう思う割合が顕著に高くなっており（順番に94%、94%、79%）現状の問題点としての深刻さが伺える。
④参画したい交流事業について やってみたい交流事業の内容については、全体的に現在ある資源や技術を活かした活動への要望が高い結果となっている。地区別に見ると「すでにやっている」と「やりたい」という回答を合わせると50%以上になる項目は以下のようにになっている。

(2) 問題点や課題

表 - 4 問題点や課題の整理

現在の状況や問題点	現在の対応	今後の課題
<ul style="list-style-type: none"> ・遊魚や民宿、定置見学のような様々な運営はなされているが、これらがネットワークされるような広がりはない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・積丹半島観光連絡協議会のように、半島全域を視野に入れた観光ネットワークの形成が始められている。 ・官民一体となった協議会等が発足（余市町の「余市町 明日の観光を考える会」等）し、交流事業に向けての勉強やビジョンづくりが始められている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各地域で発足している協議会が情報を交換し合う等横の連携をとっていく。
<ul style="list-style-type: none"> ・プレジャーボートや釣り客のゴミの問題、ダイバーの密漁の問題は多くの地区が悩んでいる。 ・海レク資源が豊富で札幌からの交通の便がよい後志地域には、今後も来訪者が増えることが予測される。 ・人が入り込むことへの期待感（地域に活気が出る）と不安感（ゴミ問題等）の2側面がある。 ・現在の地域には活気がないと認識している漁業者が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・プレジャーボートの漁港利用については、北海道の条例によって、ルールづくりがされている。 ・小樽では3セクで運営されているマリナーと漁協が協定書を交わし、トラブルに備えて市から基金を受けている。 ・密漁は各地区毎に監視体制をとっている。 ・神恵内村では村営のダイビング事業を行っており、漁業者にライセンスを取得させる等、漁業者が携わることのできる機会をきちんとつくっている。また、ポイント探しにあたっては漁業者の意見を漁業との共存を重視した事業展開が心がけられている。 ・漁港や漁場利用のルールづくりは遅れている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・来訪者のマナーについては今後の大きな課題。 ・人の入り込みを交流事業や産品販売等につなげていく仕組みづくり。 ・交流事業の目的やコンセプト、運営組織、管理体制等の確立。 ・地域と漁業者との連携。 ・磯場の一部開放（古平の案）等ルールを作って来訪者を遊ばせるような仕組みづくり（漁場と海レクの場を分けて共存）。
<ul style="list-style-type: none"> ・漁業を営むに当たっては、後継者不足、資源減少等の多くの問題がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウニの種苗生産やヒラメの中間育成、クロソイの放流や養殖等つくり育てる漁業が行われている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ブルーツーリズム事業が収入機会や雇用機会に繋がるような展開が望まれる。 ・事業推進に当たっては高齢者や女性、若者の役割を明確に捉えていくことが必要。 ・ブルーツーリズム事業が収入機会や雇用機会に繋がるような展開が望まれる。 ・事業推進に当たっては高齢者や女性、若者の役割を明確に捉えていくことが必要。
<ul style="list-style-type: none"> ・体験漁業を行いたいという要望を持っている漁協もある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・安全性の問題や漁業者の協力の点で問題がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・安全対策 ・漁業者との協力体制

4. 成果の活用

本調査において、後志地域における観光（ブルーツーリズム）への地域としての取り組み状況や漁業者の認識についての把握ができた。次年度は当該地域の地域振興へ向けての課題について、具体的な方向性についての検討を行っていく。